

対人関係における互恵性に及ぼす自尊感情の影響 — Robson 多次元自尊感情尺度を用いた検討 —

加藤乃武英・鷲見 克典

生産システム工学科

(2001年8月29日受理)

Influences of Self-Esteem on Reciprocity: A Use of Robson Multi-Dimensional Self-Esteem Questionnaire

Nobuhide KATO and Katsunori SUMI

Department of Systems Engineering

(Received August 29, 2001)

The purpose of the present study was to examine the effects of self-esteem on reciprocity in one's interpersonal relationships in general. All subjects in this study were male undergraduate and graduate students. The instruments used to measure self-esteem and reciprocity were the Reciprocity subscale of the Interpersonal Relationship Inventory (IPRI-R) and the Robson's Self-esteem Questionnaire (RSEQ), respectively. The RSEQ was designed as a multi-dimensional measure of self-esteem. From a factor analysis of the RSEQ items, three factors were found: Self-Worth, Social Acceptance, and Competence. A multiple regression analysis revealed that social acceptance and competence influenced reciprocity. A cluster analysis was adopted for grouping subjects into the self-esteem subtypes, and four distinctive groups emerged: High Social Acceptance and Competence, High Self-Worth, Low Self-Esteem, and High Self-Esteem. An ANOVA on the Reciprocity scores indicated significant differences among self-esteem subgroups. Further analysis clarified that the Reciprocity scores on the High Self-Worth and Low Self-Esteem groups were significantly lower than the scores of the High Social Acceptance and Competence and High Self-Esteem groups.

1. 問題と目的

1.1 対人関係における互恵性

互恵性は対人関係における最も重要な特性の1つであり (Buunk & Prins, 1998), これまで, 恋愛関係, 友人関係, 職場の人間関係を中心に, 多くの研究がなされてきた (Buunk & Prins, 1998; 松浦, 1991, 1992; 中村, 1990; 奥田, 1994)。互恵性とは, 社会的交換過程において, 相手と相互に正や負の報酬を与えあうことによって, 最終的に両者が得る報酬が等しくなる傾向のことである (Gouldner, 1960)。一般に, 互恵性の強い衡平な交換関係は, デイストレスが低く, ポジティブな感情と関連するものであるが, 互恵性の弱い不衡平な関係は, ネガティブな感情と関連をもつストレスフルな状況である (Buunk & Prins, 1998; Friedman, 1976; Longmore & Demaris, 1997; Nadler, Mayselless, Peri, &

Chemerinski, 1985)。互恵性の生起過程としてよく知られているものに, 次の2つがある (Rook, 1987)。1つは, 報酬を受け取ることによって生じた互恵の義務感によってコストが媒介される過程である。もう1つは, 報酬の受取によって満足感が生じ, その満足感がコストの投入をうながす過程である。こうした互恵性の生起の背景には, 社会的交換理論, 社会的衡平理論, 相互依存性理論によって示された機制 (奥田, 1994, 1996; 末永・安藤, 1998; 田中, 1996; 土田, 2000; 吉田・松原, 1999) や互恵性規範 (norm of reciprocity: Gouldner, 1960; Greenberg & Westcott, 1983) などがある。

社会的交換理論の中心となる主張は, 自分の行動から得られる報酬と, それによって失うコストが計算され, 利益すなわち報酬とコストの差を最大にするような行動がとられるというものである (Homans, 1961)。社会的衡平理論では, 分配上の正当性の概念が導入され, 互い

に交換関係にある者における分配上の正当性は、互いの利益が投資に比例しているときに得られる、とされている (Adams, 1965)。相互依存性理論では、社会的交換が成立する関係は、互いに財を提供しあうという点で、それぞれの当事者の報酬が部分的に相手の行動に依存していると考えられることから、交換関係を相互依存関係としてとらえている (Thibaut & Kelly, 1959)。また、互恵性規範とは、他者から好意や援助を与えられたとき、その他者に同等の価値のあるものを返報しなければならないという規範であり (Gouldner, 1960)、次の2つの普遍的形式をもつ社会規範である。1つが、援助を提供してくれた人に対しては援助を返すべきであるという規範であり、もう1つが、助けてくれた人を傷つけてはいけないという規範である (Cialdini, Green & Rusch, 1992)。

以上のような、多様な理論によって扱われてきた互恵性をはじめ、対人関係の特性と関連をもつことが示されてきた要因には、よく知られているようにさまざまな要因がある。このうち、パーソナリティ要因の1つに自尊感情がある。そこで次に、自尊感情についてまとめ、対人関係との関連についてみていく。

1.2 自尊感情の概念と対人関係との関連

自尊感情とは、個人のもつ自己の価値や有能さについての評価からもたらされる感情であり (上野, 1986)、自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚、感情である (遠藤, 1992)。一般に、自尊感情の強い者は、自分自身を「好ましい人間である」と感じ、自分の行動を価値のあるものとして積極的に評価する一方、自尊感情の弱い者は、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑などを示し、自分が観察している自己に対して尊敬を欠いているとされる (遠藤, 1992)。

この感情に内包される意味や抽象化水準などを巡っては、多くの見解や議論がある (Butler, Hokanson, & Flynn, 1994; 遠藤, 1992; 榎本, 1998; Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995)。たとえば、自尊感情を個人的自尊感情と集団的自尊感情に区別する立場がある。集団的自尊感情とは、自分の属する集団を高く評価することによって生じるポジティブな感情のことであるが、一般に自尊感情と呼ばれているのは、個人的自尊感情の方である (榎本, 1998)。また、特性的自尊感情と状態的自尊感情とに分ける立場もある。特性的自尊感情とは、資質として既にもっている自尊感情であるのに対して、個々の出来事によって変動する自尊感情を状態的自尊感情という (Butler et al., 1994; Leary et al., 1995)。状態的自尊感情に関しては、一時的な情動状態を自尊感情に含めるべきではないとする意見もある (榎本, 1998)。

また、自尊感情を単一次元ととらえるか多次元ととらえるかについても、さまざまな立場がある (Battle, 1981; Coopersmith, 1967; Janis & Field, 1959; Pope, McHale, & Craighead, 1988; Robson, 1988, 1989; Rosenberg, 1965)。

自尊感情を単一次元としてとらえた定義として、Rosenberg (1965) による特別な対象としての自己に対するポジティブまたはネガティブな態度、Coopersmith (1967) による自分自身を有能、有意義、成功的、価値のあるものと信じる程度、Janis & Field (1959) による不適切な感情、社会的禁止、テスト不安などの社会的な適応の感情、といった定義がある。これまでの自尊感情に関する研究では、主にこの単一次元による定義とその操作化が用いられてきた。

一方、多次元として考えるいくつかの立場もよく知られている。たとえば Battle (1981) は自尊感情を、自分自身に対する全般的な価値の認知、対人相互作用の認知、本質的な自己価値の認知の3次元から構成される概念としてとらえている。DuBois, Felner, Brand, Phillips, & Lease (1996) は、仲間、学校、家族、身体像、運動と競技からもたらされる自分自身の満足感あるいは不満足感として自尊感情をとらえ、Self-Esteem Questionnaire と名付けた42項目からなる小中学生用の多次元の自尊感情尺度を作成している。Norem-Hebeisen (1976) は自尊感情の下位概念として、基本的受容、条件付き受容、現実と理想の一致、自己評価の4つを考えている。O'Brien (1991) は、独自に作成した Multidimensional Self-Esteem Inventory と呼ばれる116項目からなる自尊感情尺度が、コンピテンス、愛らしい魅力 (Lovability)、好感 (Likability)、個人的力 (Personal Power)、自己統制、道徳に関する自己評価 (Moral Self-Approval)、身体の外観、身体の機能といった自尊感情の8つの構成要素にくわえて、全般的自尊感情、同一性の統合 (identity integration)、防衛的自己高揚の計11の下位概念から構成されることを確認している。また、Robson (1989) は自尊感情を、自分自身の価値 (worth)、重要性 (significance)、魅力、コンピテンス、要求を満足させる自分の能力、の5つからもたらされる満足感や自己受容感と定義し、自分自身の重要性、価値 (worthiness)、外観と社会的な受容性 (appearance/social acceptability)、レジリエンスと決意 (resilience and determination)、コンピテンス、個人的な運命のコントロール (control over personal destiny)、存在の価値の7つの構成要素によって操作化している。このRobsonの定義は、Coopersmith (1967) などの定義に基づくものである (Robson, 1988, 1989)。自尊感情を多次元でとらえる定義は、最近の研究で頻繁に用いられるようになって

きている。

周知のように、自尊感情との関連が仮定され、その関連が経験的に検証されてきた要因は枚挙にいとまがないほどである。そうした要因として対人関係にかかわる多様な要因がある(原田, 1992)。

対人関係と自尊感情の関連を検討した研究は非常に多く、自尊感情は対人関係の多様な側面との関連が実際に認められてきている。衡平理論から予測される報酬過多あるいは報酬過少の不衡平による、個人に対する動機づけ効果が、自尊感情と密接に関連することは多くの研究で主張されている(Kwun & Cummings, 1994)。また、たとえば、高い評価を受けている他者あるいは集団と自分自身の間に何らかの関連があることを強調することによって、自尊感情を強めようとしたり(Cialdini, Borden, Thorne, Walker, Freeman, & Sloan, 1976)、自分が何らかの脅威にさらされた時に、自分よりも恵まれていない他者と下向きの比較をすることによって自尊感情を維持、高揚させる、などの傾向はよく知られている(Gibbons & Gerard, 1991; Taylor, Wood, & Lichtman, 1983)。比較的自尊感情の強い者は、弱い者よりも、しばしば他者から好意を抱かれ、よりよい対人関係を築くことが可能であるともされている(Taylor, 1989)。また、親子関係において、両親の養育行動が子どもの自尊感情に影響を及ぼすとの主張もある(Coopersmith, 1967)。リーダーシップに関して、自尊感情と教師のリーダーシップの関連を検討した研究から、平均的な自尊感情得点を示した男性教師のリーダーシップ行動が、生徒にとって最も適切であると認知される傾向にあり、他方、女性教師においては、自尊感情と無関係にPM型リーダーシップが多く、自尊感情が強いほどpm型リーダーシップが減少していくことが明らかとなっている(蘭, 1992)。また、ソーシャル・サポートに関して、互恵的なソーシャル・サポートの不足と自尊感情の低下が関連するとの指摘(佐々木・島田, 2000)や、ソーシャル・サポートを受けている者は、よりよい示唆や自信が与えられ、統制の意識を強めることができる(Taylor, 1989)といった報告がある。さらに、青年期の互恵的な友人関係と自尊感情の関連(Bishop & Inderbitzen, 1995)や、援助関係における平衡と自尊感情の関連(Stevenson, Maton, & Teti, 1999)が検討されてきている。援助関係における被援助者の反応に関する理論的枠組にも、衡平理論、リアクタンス理論、帰属理論の他に、援助が被援助者の自尊感情に与える意味から、被援助者の反応を説明しようとする、自尊感情に対する脅威モデルがあることもよく知られている(Fisher, Nadler, & Whitcher-Alagna, 1982)。

対人関係に関する要因との関連において、自尊感情は、

結果要因や調整要因として位置づけられることも多いが、因果関係上の先行要因としての役割も重要なものである。これは、自尊感情の強さが、情緒的、行動的といったさまざまな側面に効果をもたらすことがよく知られていることから、理解できよう(Gecas, 1982; Gecas & Burke, 1995)。また、自尊感情は、自他の相互作用において、他者からの働きかけの認知や他者に対する反応を規定すると主張されている(蘭, 1986)。たとえば、自尊感情の強い者は、他者の援助要請に気づきやすく、より積極的に援助行動をとる傾向がみられ(原田, 1992)、自尊感情を維持できるように友人を選択する傾向がある(Tesser & Campbell, 1982; 磯崎・高橋, 1988)といった研究結果がある。

そこで次に、自尊感情が対人関係における互恵性を規定する要因となる可能性について考えていきたい。

1.3 互恵性の規定要因としての自尊感情

いうまでもなく、互恵性は、交換関係における不衡平状態や衡平状態と密接に関連する特性である。一方、自尊感情は、衡平関連現象の理論的及び経験的研究において、衡平行動の予測における重要なパーソナリティ変数であり、神経症的傾向、ローカス・オブ・コントロールなどと共に、不衡平状態の解決行動に影響を及ぼす可能性をもつ要因であるとされている(Kwun & Cummings, 1994)。また、自尊感情の弱さは、互恵性の強い対人関係の維持を困難にさせる要因の1つである、とする研究結果も報告されている(Buunk & Prins, 1998)。自尊感情の強い者ほど、将来にわたって互恵的関係の安定的な継続が予想される場合に、より強く衡平な交換関係を築くように行動し(Friedman, 1976)、必要な援助を求めようとする傾向をもつ(Nadler et al., 1985)ことも、経験的に認められてきているのである。

報酬分配の観点からも、自尊感情が互恵性に影響を及ぼすことが示唆される。報酬分配におけるパーソナリティ属性の影響として、自己意識、共感性などの他に、自尊感情があげられている(田中, 1996)。自尊感情の強い者は、相手が行った分配方法ではなく、自分や相手の遂行度に基づいて分配を行う傾向が認められている(Brockner, O'Malley, Hite, & Davis, 1987)。このことから、自尊感情の強い者は、相手の分配方法に比較的左右されずに衡平分配を行い、互恵性が維持される傾向をもつといえよう。

援助行動に関する研究結果からも、自尊感情が互恵性を規定することが理解できる。被援助者は援助者から援助要請に応じてもらった時点で、援助者に申し訳ない、悪いといったネガティブな感情、すなわち心理的負債感を負い(Greenberg & Westcott, 1983)、自尊感情が低

下する可能性を指摘できる (Fisher et al., 1982)。あるいは、被援助者が同等の価値のあるものを返報できない場合にも、同様に自尊感情の低下懸念が生じるといえる (Fisher et al., 1982)。また、自己評価維持モデル (Tesser, Campbell, & Smith, 1984) によれば、自尊感情が脅威にさらされたとき、自分自身をポジティブに評価できるように、あるいは他者からポジティブな評価が得られるように動機づけられる (Tesser & Campbell, 1982)。そうした評価を獲得することで、自尊感情の低下を防ぐ必要から、被援助者は援助者に対して積極的に返報を行う傾向をもつ。くわえて、援助を受けることで不衡平が生じた場合、援助者に返報することが最も確実にこの不衡平を解消する方法となるといわれている (相川, 1986)。したがって、自尊感情の強い被援助者は、不衡平の解消に向けて返礼行動をとる傾向が強く、互惠性の強い対人関係が生じやすいと考えることができる。

個人がもつ規範との関連では、自尊感情の程度が高いほど、互惠性規範へのコミットメントが強いという報告がある (Nadler et al., 1985)。個人が個人的規範によって示される行動をとらない場合、罪の意識や自尊感情の低下をもたらす、逆に個人的規範に従うことによって、安心感を得ることができ、自尊感情が高まるものである (Schwartz, 1973)。したがって、被援助者が個人的規範として互惠性規範を受け入れている場合、自尊感情の維持のために、同等の価値のあるものを積極的に返報しようとすると考えられる。このように、自尊感情が互惠性規範を通じて互惠性と結びつくことも考えられる。

さらに、援助行動の結果としての成功経験を通じた、互惠性への自尊感情の影響も指摘できる。自尊感情の強い者はより援助的であり (原田, 1992)、困難が伴う場合であっても積極的に援助行動に取り組み、結果として成功をもたらすことが示唆されている (成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)。さらに、失敗経験後であってもさえも、自尊感情が強い個人は、能力評価や将来の課題に対する期待が比較的高く維持され (McFarlin & Blascovich, 1981; Moreland & Sweeney, 1984)、自己の統制能力を信じるのが、動機づけや持続力につながり (Taylor, 1989)、持続的な課題遂行を通して、高い遂行期待が将来の高い遂行成績を保証するものになりやすい、といわれる (McFarlin, Baumeister, & Blascovich, 1984)。このような高い遂行期待と効力感が、能力の発揮をうながすために、自尊感情の強い者は成功をもたらしやすいと考えることができる (伊藤, 1998)。また、強い自尊感情は、より熱心に長時間、個人を課題に向かわせるために、目標達成の可能性が増すと考えられる (Taylor, 1989)。以上から、より強い自尊感情をもつ者は、積極的な援助行動によって成功を引

き出す可能性がより強く、この成功経験を通じて互惠性の強い関係を生みだし、維持できることが示唆される。

ストレスに対する有効な対処資源としての自尊感情という視点から、互惠性への影響を考えることもできる。先に記したように、不衡平な交換関係は、個人にディストレスを感じさせるストレスフルな状況である。そして、このような関係に参加している個人は、適切な対処によって衡平状態の回復を求めようとする傾向がある (Buunk & Prins, 1998; Friedman, 1976; Longmore & Demaris, 1997; Nadler et al., 1985)。一般に、自尊感情の構成要素ともいえる、自己価値あるいは自己効力の感覚がより強い者は、現在の状況を変化させるために必要な作業が達成されうるという感覚をもてることが認められている (Longmore & Demaris, 1997)。くわえて、自己価値感や自己効力感は、ストレスフル状況に対して、精神的に課題中心的な対処を実施させ、効果的な変化を与えさせる個人内資源となりうる (Longmore & Demaris, 1997)。そして、自尊感情の低さは、互惠性の強い対人関係の維持を困難にさせる要因の1つといえたのであった (Buunk & Prins, 1998)。したがって、自尊感情のより強い個人は、交換関係における衡平の回復に、より積極的に取り組み、互惠性の強い対人関係を形成、維持できると仮定されよう。

これまでみてきたように、個人の全般的な対人関係における互惠性に対して、自尊感情が及ぼすポジティブな影響は強く支持されそうである。しかしながら、対人関係の特定の形態における互惠性ではなく、現在の全般的な対人関係における特性としての互惠性に、自尊感情が及ぼす効果については、ほとんど研究されていない。そこで、本研究では、自尊感情が、対人関係全般における互惠性に与える影響について、経験的検討をくわえることを目的とする。また、自尊感情を単次元としてではなく、多次元の構成概念としてとらえることで、互惠性と自尊感情の複数の下位概念との関連を検討していく。

2. 研究1：互惠性尺度と多次元自尊感情尺度の信頼性の検討

2.1 目的

自尊感情が互惠性に及ぼす影響を検討するに先だって、本研究で用いる尺度の因子構造と信頼性の確認を行うことを研究1の目的とする。使用する尺度は、互惠性が Tilden, Nelson, & May (1990a, 1990b) の Interpersonal Relationship Inventory の下位尺度 (IPRI-R)、自尊感情が Robson (1989) の Self-esteem Questionnaire (RSEQ) である。

尺度の因子構造について、IPRI-Rは原尺度を作成し

た Tilden et al. (1990a, 1990b) から、単一次元であることが予測される。

一方、RSEQ は自尊感情を多次的にとらえる尺度であることから、複数の因子をもつことが予想される。前記のとおり Robson (1989) は当初この尺度に、自分自身の重要性、価値、外観と社会的な受容性、レジリエンスと決意、コンピテンス、個人的な運命のコントロール、存在の価値の7つの構成要素を想定していた。しかし、Addeo, Greene, & Geisser (1994) は Robson が最尤法によるオブリミン回転とエカマックス回転から、“魅力と他者からの評価 (Attractiveness, Approval by Others)” “満足と価値と有意味 (Contentment, Worthiness, and Significance)” “自律的な自己尊重 (Autonomous Self-Regard)” “コンピテンスと自己効力” “存在の価値” といった5因子構造を確認したことを報告している。また、Addeo et al. 自身は、同様の手法を用いた因子分析結果から、“自己卑下 (Self-Depreciation)” “魅力” “自己尊重と自信 (Self-Respect/Self-Confidence)” の3因子を確認している。Addeo et al. によれば、第1因子の“自己卑下”は、Robson によって確認された“満足と価値と有意味”と“存在の価値”、第2因子の“魅力”は Robson による“魅力と他者からの評価”、第3因子の“自己尊重と自信”は Robson による“自律的な自己尊重”と“コンピテンスと自己効力”に対応した内容であった。

このように、Robson の自尊感情尺度から確認されてきた因子構造は、十分に一致しているとはいえない。したがって、本研究で確認される因子構造を予測することは難しいが、Addeo et al. (1994) や彼らが報告している Robson の結果における因子と関連する、複数の因子が認められるのではないかと考えられる。本研究で自尊感情尺度に複数の因子が確認された場合、これらの因子を下位尺度として、以降の分析を行うことにする。

2.2 方法

2.2.1 調査対象者

互恵性尺度の検討における調査対象者は、男子大学生および大学院生192名（平均年齢21.61歳、標準偏差1.54）であった。一方、多次元自尊感情尺度の調査対象者は、同様に男子大学生および大学院生196名（平均年齢21.49歳、標準偏差1.69）であった。

2.2.2 測定尺度

(1) 互恵性尺度 前記した Tilden et al. (1990a, 1990b) の13項目 IPRI-R である。個人の現在の対人関係全般における互恵性の強さを測定するものである。日本語化にあたって、互恵性の操作化が適切に行われるように十分に配慮した。「あてはまる」から「あてはまら

ない」の5段階評定であり、すべての項目の合計得点を尺度得点とするものである。尺度得点が高いほど、互恵性が強いことになる。なお、使用にあたっては原尺度作成者である Tilden の許可を得ている。

(2) 多次元自尊感情尺度 前記した Robson (1989) の30項目 RSEQ を、作成者である Robson の許可を得た上で日本語化して用いた。この尺度は個人の自尊感情を多次元からなる構成概念にとらえ、測定するものである。日本語化は、自尊感情の適切な操作化となることに留意しながら、英語と日本語に堪能な者によるバックトランスレイトを通じて行われた。この尺度は「あてはまる」から「あてはまらない」の5段階評定を使用し、得点が高いほど自尊感情が強いことになる。

2.3 結果と考察

2.3.1 互恵性尺度の因子構造と内的整合性

IPRI-R の項目得点について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った結果、予想したとおり、1因子構造が確認された。表1に因子負荷量と因子の寄与率を示した。

表1 IPRI-R の因子分析結果 (N=192)

項目番号	因子負荷量
12	.84
8	.80
9	.80
1	.79
4	.78
2	.77
10	.74
3	.68
6	.68
11	.66
13	.66
7	.65
5	.56
寄与率	53.26
寄与率は%	

13項目すべての合計得点の平均値と標準偏差、さらに Cronbach の α 係数を表2にまとめた。 α 係数は .93 であり、IPRI-R に高い内的整合性が認められた。ここで確認された IPRI-R の日本語版を、以下単に互恵性尺度と呼ぶ。

表2 互恵性の平均値、標準偏差、 α 係数 (N=192)

M	SD	α
51.13	10.18	.93

2.3.2 RSEQの因子構造と内的整合性

RSEQ の30項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行ったところ、表3に示したような3因子構造が確認された。また、エカマックス回転あるいはバ

ロマックス回転の結果からも、同様の因子構造が認められた。第1因子は、「自分自身について、変えたいところがある」「今の自分に満足している」などの項目が高い負荷量を示しており“自己価値”と命名した。第2因子は「他者に好かれやすい」「魅力的だと思われる」などの項目が高い負荷量を示していることから“社会的受容性”と命名した。そして、第3因子は「何ひとつやり遂げられないように思う」「物事を自分で決めて、頑張ることができる」などの項目が高い負荷量を示していることから“コンピテンス”とした。

表3 RSEQの因子分析結果 (N=196)

項目番号	因子負荷量		
	1	2	3
5	.64	-.23	-.13
21	.58	-.02	.12
10	-.58	.10	.19
27	.54	-.07	.36
17	.49	.10	.13
23	.48	-.25	.44
2	.41	-.21	.12
29	-.40	.13	-.12
16	-.38	.22	-.12
25	.38	-.05	.10
8	-.32	.23	.05
26	-.31	.23	-.11
3	-.09	.66	-.05
9	-.08	.66	-.09
15	-.22	.66	-.04
12	-.11	.55	-.10
30	-.11	.50	-.18
13	.10	-.43	.34
24	-.10	.37	-.22
4	-.12	.30	-.27
6	.21	-.26	.65
11	.05	.10	.44
7	-.09	-.16	.43
18	-.16	.23	-.41
22	.10	-.05	.41
28	.25	-.26	.40
20	.06	-.19	.40
19	.30	-.16	.37
1	-.16	.30	-.36
14	-.19	.04	.30
寄与率	10.34	10.03	8.57

寄与率は%

RSEQについて、本研究ではAddeo et al. (1994)と同じ因子数である3因子が確認されたが、各因子の内容はAddeo et al.の結果とは異なっていた。Addeo et al.が報告しているRobsonによる因子の詳細が不明であるため、ここではRobsonによる5因子の名称と、Addeo et al.の因子分析結果とRobsonによる分析結果との対応から、本研究結果とRobsonの因子分析結果との対応を推測してみる。第1因子の“自己価値”はRobsonによる“満足と価値と有意味”と“自律的な自己尊重”に、第2因子の“社会的受容性”はRobsonによる“魅力と他者からの評価”と“存在の価値”に、第3因子の“コ

ンピテンス”はRobsonによる“コンピテンスと自己効力”に、それぞれ対応しているのではないかと推測できる。また、Robson (1989)がRSEQ作成時に想定した7つの構成要素との対応を考えてみる。こちらも詳細な項目内容が不明であるので推測になってしまうが、“自己価値”はRobsonの自分自身の重要性、価値、外観と社会的な受容性、“社会的受容性”はRobsonの価値、外観と社会的な受容性、“コンピテンス”はRobsonの外観と社会的な受容性とコンピテンスに、それぞれ対応しているのではないかと考えられる。

因子分析の結果に基づき、各因子に高い負荷量を示す項目(表3)によって構成された下位尺度は、自己価値12項目、社会的受容性8項目、コンピテンス10項目となった。各下位尺度の平均値、標準偏差は表4にまとめたとおりである。3下位尺度すべてに適度な α 係数が認められ、内的整合性が確認された(表4)。

表4 RSEQの平均値、標準偏差、 α 係数 (N=196)

下位尺度	M	SD	α
自己価値	34.39	6.68	.79
社会的受容性	25.24	4.15	.78
コンピテンス	35.35	5.02	.72

3. 研究2：互恵性に及ぼす自尊感情の影響

3.1 目的

前述のとおり、個人の対人関係における互恵性に対して、自尊感情のポジティブな影響が期待されることから、研究2では両構成概念間の関連について検討することを目的とする。分析にあたって、研究1において因子構造と信頼性が確認された互恵性尺度の得点を従属変数、自尊感情の3つの下位尺度である自己価値尺度、社会的受容性尺度、コンピテンス尺度の各得点を独立変数とした。

まず、下位尺度間の相関係数を確認した後に、重回帰分析によって自尊感情の下位概念が互恵性に及ぼす効果について検討する。次に、互恵性に対する自尊感情の3下位概念の組み合わせ効果をみるために、自尊感情の下位尺度を用いてクラスター分析を行い調査対象者の類型化を試み、類型間における互恵性の程度の違いについて、分散分析による検討を行う。

3.2 方法

3.2.1 調査対象者

男子大学生および大学院生238名。平均年齢は21.47歳、標準偏差1.63であった。

3.2.2 測定尺度

研究1で確認された互恵性尺度とRSEQの下位尺度である自己価値尺度、社会的受容性尺度、コンピテンス尺

度の4尺度を使用した。

3.3 結果

互恵性尺度およびRSEQの3下位尺度の平均値、標準偏差、 α 係数は表5のとおりであった。平均値はすべて、研究1で算出された平均値(表2及び表4)との間に有意な差はなかった。

表5 平均値、標準偏差、 α 係数、相関係数(N=238)

下位尺度	M	SD	α	1.	2.	3.
1. 互恵性	48.06	8.34	.82	—		
2. 自己価値	34.06	7.20	.78	.22***	—	
3. 社会的受容性	25.08	4.57	.76	.44***	.39***	—
4. コンピテンス	35.13	5.28	.68	.22***	.53***	.39***

*** $p < .001$

互恵性および、自己価値、社会的受容性、コンピテンスのRSEQの3下位尺度間の相互相関係数は、表5のとおり、すべて0.1%水準で有意な正の相関を示した。

互恵性を従属変数、RSEQの各下位尺度を独立変数として重回帰分析を行い、標準偏回帰係数をまとめたものが表6である。標準偏回帰係数は、社会的受容性が正で0.1%有意、コンピテンスが正で0.1%有意であったが、自己価値に関しては有意でなかった。社会的受容性とコンピテンスは、互恵性のポジティブな規定因であることが確認された。

表6 互恵性の重回帰分析における標準偏回帰係数(N=238)

自己価値	社会的受容性	コンピテンス
-.04	.64***	.39***

*** $p < .001$

RSEQの下位尺度を用いてクラスター分析(Ward法)を行い、4クラスターを採用し、調査対象者を4類型に分けた。この4類型における自己価値、社会的受容性、コンピテンスの各尺度の平均値と標準偏差は表7にまとめたとおりである。各クラスターにおける自尊感情の3次元の平均得点を、すべての対象者の平均値と比較して、クラスターの特徴についてまとめてみると、第1クラスターは社会的受容性とコンピテンスが比較的高く、自己価値は平均的な類型といえ、他方、第2クラスターは自己価値が比較的高く、社会的受容性とコンピテンスは平均的な類型であった。また、第3クラスターは自己価値、

社会的受容性、コンピテンスのすべてにおいて比較的低い群であり、逆に、第4クラスターは自尊感情の3次元すべてが比較的高い類型であった。

これら4つのクラスターの互恵性尺度得点の平均値と標準偏差は表8に示したとおりである。この互恵性尺度得点について一元配置分散分析を行ったところ、クラスター間に有意な差が認められた($F(3,234)=14.56, p < .001$)。そこでScheffe法による多重比較を行い、結果を表9にまとめた。第1クラスターと第4クラスター、第2クラスターと第3クラスターとの間に有意な差はみられなかったが、それら以外のクラスター間には互恵性尺度の得点に有意な差が認められた。そして、第2クラスターあるいは第3クラスターは、第1クラスターあるいは第4クラスターよりも、有意に互恵性尺度得点が低いことが確認された。

表8 クラスター毎の互恵性の平均、標準偏差(N=238)

クラスター	n	M	SD
1	63	52.02	6.97
2	55	47.02	8.67
3	93	44.83	8.12
4	27	53.41	8.25

表9 Scheffe法による多重比較(N=238)

クラスター	クラスター	平均値の差
1	2	5.00**
	3	7.19***
	4	1.39
2	3	2.19
	4	6.39**
3	4	8.58***

** $p < .01$, *** $p < .001$

3.4 考察

互恵性尺度とRSEQの3下位尺度である自己価値、社会的受容性、コンピテンスのすべての相互相関係数で正の0.1%有意な値が得られた。互恵性と自尊感情の相関関係に限ってみても、自尊感情のいずれの次元が高い個人も、より強い互恵性を示すことがわかる。しかし、互恵性と自己価値あるいはコンピテンスの次元の相関係数は、比較的規模が小さく、弱い相関であった(いずれも $r = .22$)。自尊感情と互恵性に相関関係があることは、Nadler et al. (1985) や Bishop & Inderbitzen (1995)

表7 クラスター毎のRSEQの平均、標準偏差(N=238)

クラスター	n	自己価値		社会的受容性		コンピテンス	
		M	SD	M	SD	M	SD
1	63	33.52	3.16	28.46	3.32	38.32	3.86
2	55	38.73	3.51	24.20	2.35	34.67	2.99
3	93	28.26	4.73	21.81	3.24	31.34	4.23
4	27	45.81	5.74	30.22	4.47	41.70	3.99

などでも確認されており、本研究でも同様の結果が得られたといえる。

互恵性を従属変数、RSEQの各下位尺度を独立変数とした重回帰分析の結果から、社会的受容性とコンピテンスの次元は、互恵性の規定因となることが示された。他者から受け入れられているという感覚をもつことや、自分自身のコンピテンスを認めることが、現在の対人関係全般における互恵性の程度を高める可能性をもつことが示されたといえよう。社会的に自分が承認され、受容されているという感覚が、他者と積極的に交換行動をとることをうながし、互恵性の程度を高めることは直感的にも支持できるだろう。また、交換関係における不均衡はストレスフルな事態と呼べる状況であり (Buunk & Prins, 1998; Friedman, 1976; Longmore & Demaris, 1997; Nadler et al., 1985), こうした状況の解消にあたって、自分自身のコンピテンスへの確信が有益であると考えられることは、コンピテンスの次元と密接に関連する自己効力感をもつ、ストレス対処における有効性と一致するものであるといえる (Longmore & Demaris, 1997)。

一方、自己価値の次元は互恵性を規定する要因とならなかった。この結果は、互恵性と自己価値の単純相関が、有意ではあるが比較的弱かった結果と矛盾するものではない。Longmore & Demaris (1997) によれば、強い自己価値の感覚をもつ者は、自分の価値を傷つけることなく、報酬過少に耐えることができるという。このことから、自尊感情における自己価値の次元が高い場合に、より報酬過少なまま、互恵性の弱い関係を継続させてしまっている可能性も考えられる。今後、対人関係における、報酬の過多と過少を条件として考慮しながら、自己価値の次元と互恵性の関連を再検討する必要があるといえるだろう。くわえて、Kwun & Cummings (1994) によれば、親密さの程度によって、不均衡への反応やその解決方法の選択が異なると主張されていることから、検討にあたって、親密さの程度による互恵性の程度の相違にも留意していく必要があるだろう。

自尊感情の各下位尺度を用いたクラスター分析から得た、4つのクラスターにおける互恵性尺度得点を多重比較したところ、クラスターをさらに2つの群に分けることができる結果となった。1つは、自尊感情の社会的受容性及びコンピテンスの次元において、対象者全体の平均値よりも比較的高い値を示した第1クラスターと、自尊感情の3次元すべてにおいて比較的高得点であった第4クラスターであり、より強い互恵性を示した群である。この群よりも有意に低い互恵性得点を示した群が、自己価値のみが比較的強い第2クラスターと、自尊感情の3次元すべてで比較的低かった第3クラスターを含むものであった。こうした結果について、まず、自尊感情の3

次元すべてにおいて比較的高得点であった類型の方が、同じ3次元すべてにおいて比較的低得点であった類型よりも、互恵性尺度得点が有意に高かったことは、相関係数などから容易にうなずける結果であったといえる。その一方で、社会的受容性とコンピテンスの2次元が比較的高い類型が、自己価値のみが比較的高かった類型に比べて、有意に互恵性が強いと認められたことは、先の重回帰分析の結果から、社会的受容性とコンピテンスの次元が互恵性に対して有意な説明変数であり、自己価値の次元が有意な説明変数とならなかったことと一致するものであるといえよう。したがって、他者からの承認や受容の感覚、そして自分自身のコンピテンスに対する自信といった、自尊感情の構成要素をより強くもつことの方が、自己に価値があるという感覚を強くもつよりも、比較的強い互恵性の形成と維持に重要なものとなる可能性が、再確認されたといえる。

4. 全体考察

本研究の主要な目的は自尊感情が互恵性に及ぼす影響を検討することであった。これまでの研究から、個人の自尊感情は、現在の全般的な対人関係における互恵性に対して、ポジティブな効果を及ぼすことが仮定された。また、本研究では、自尊感情を多次元自尊感情尺度によって測定した。

互恵性と自尊感情の尺度における下位尺度の確定と信頼性等の確認を行った結果、個人の現在の全般的な対人関係における互恵性を測定する Tilden et al. (1990a, 1990b) の IPRI-R の日本語版は、単一次元性と高い内的整合性が確認された。また、自尊感情を多次元的にとらえた Robson (1989) の RSEQ の日本語版については“自己価値” “社会的受容性” “コンピテンス” の3因子構造が認められ、この3次元の下位尺度に適度な内的整合性を認めることができた。これらの尺度は簡便であり、有用な尺度といえよう。これらの尺度を広く利用していくためにも、信頼性と共に、妥当性に関するより詳細な確認が必要である。また、因子構造についても、異なる集団で確認していくべきであろう。

本研究の主要な目的であった互恵性に対する自尊感情の影響に関しては、重回帰分析結果から、他者からの承認や受容の感覚、自分自身のコンピテンスに対する確信が、一般に互恵性の強い対人関係の形成と維持に寄与することが示されたといえる。他方、自己について価値があるという感覚が、互恵性に及ぼす影響はほとんどないといえた。また、この傾向は、クラスター分析によって作成した類型間の分散分析及び多重比較の結果からも支持された。

本研究結果を、まず報酬分配に関する視点から考えてみる。前述したように、自尊感情の強い者は、相手の分配方法に比較的左右されずに衡平分配を行う傾向があるといえることから (Brockner et al., 1987)、互惠性が維持されやすいと考えられるのであった。本研究で自尊感情の次元であることが確認された社会的受容性の次元が高い者、すなわち他者から受け入れられているという感覚が強い者は、自分の分配方法が相手に受け入れられると知覚しやすいといえるだろう。また、同様にコンピテンスの次元が高い者、すなわち自分自身のコンピテンスに対する自信が強い者は、報酬分配を衡平に行う能力があると考えられる傾向があるといえよう。したがって、本研究結果から得られた関係を、社会的受容性およびコンピテンスの次元が高い個人は、相手の分配方法によらず、衡平分配を行うことができるために、互惠性の強い対人関係をもちやすい、と解釈することもできる。一方、自尊感情における社会的受容性やコンピテンスの次元が弱い者は、自分の分配方法が相手から肯定されるという感覚や、自分が報酬分配を衡平に行えるという評価を抱きにくいこと、結果的に相手の分配方法に左右されやすくなると推測される。この推測は今後、検討を試みる必要があるといえよう。

次に、援助行動における自己評価維持モデルに従って、本研究結果を解釈してみる。被援助者にとって、援助を受けたことは、自分独りの力では直面した問題を解決できなかった、という知覚につながりやすいと考えられる。これは自尊感情が脅威にさらされた状態とみなされ得る。そこで、被援助者は、自分自身のコンピテンスや能力を再確認するために、そして能力が低く、受け入れられない者であるとの評価を、援助者から受けないために、援助を受けたままの不衡平状態を解消しようと、積極的に返報行動をとろうとするだろう。こうした傾向は、特に自尊感情がより強い場合に当てはまるものである。したがって、より強い自尊感情は、互惠性がより強い対人関係の維持につながるものと考えられる。

互惠性規範に関する視点からも、自尊感情の強さが互惠性を規定する可能性を考えることができる。自尊感情が強いほど、互惠性規範を個人的規範としている可能性が高いという報告があることは、先に述べたとおりである (Nadler et al., 1985)。ところで、自分は他者から受け入れられていないという感覚は、そうした他者へ返報をするべきだという規範の妨げとなるだろう。つまり、社会的受容性が弱い者は、互惠性規範を内在化しにくいと考えられる。また、自分に返報の能力がないと感じている者は、互惠性規範を個人的規範とすることに抵抗が生じるだろう。したがって、社会的受容性やコンピテンスといった自尊感情の次元が高い個人こそが、互惠性規

範を個人的規範に位置づけることができ、ひいては互恵的な対人関係を形成する傾向をもつのではないかと考えることができよう。ただ、最近では、社会的行動を円滑に進めるための基準である社会規範が不明確であり、個人の行動判断の基準となる価値感も多様化していることが指摘されている (北折, 2000)。このため、社会規範としての互恵性規範が、個人的規範になりにくい状況が訪れているといえるのかもしれない。自尊感情と互恵性規範の内在化の関係は、今後詳しく検討することが必要である。

個人の対人関係全般における互恵性の向上について、本研究結果から示唆されることとして、自分自身に価値をおくことができるといった自尊感情の構成要素よりも、自分自身が他者から受け入れられ、認められているという感覚や、自分のコンピテンスに対する自信の次元を高めていくことの有効性が指摘できる。互恵性の向上策については、自尊感情との関連を重視しながら考えていくことが必要といえよう。

ところで、一概に自尊感情が強いほど互恵性の程度は高く、よい対人関係をもつといえるかどうかには疑問も残る。自尊感情が極端に強い場合、自分自身に対して高い価値、重要性を付与し、他者に強い魅力を抱かれ、十分受け入れられていると感じ、自身の高い能力に確信をもつなど、いわば自分はおよそ十全たる者であるという感覚をもった状態といえよう。この状態では、他者からの報酬は必要ないものと感じたり、むしろ余計なもの、不足した部分をあげつらう無用物と感じられる傾向が生じるだろう。報酬を拒否することは、交換活動を停滞させ、互恵性の弱い状態をもたらすといえる。本研究では、自尊感情が互恵性にポジティブな影響を与えるといった結果を得たが、両者が単純な線形関係にはないという予想も可能である。強い互恵性を備えた対人関係を形成する自尊感情の程度についても、今後の検討課題といえよう。

さらに、可能性としては、本研究の仮説とは逆に、互恵性が自尊感情に影響を及ぼすといった因果関係も考えられる。前述したように、Bishop & Inderbitzen (1995) は、少なくとも1人の友人との互恵的関係が自尊感情を強めることを報告している。これは自尊感情に対する互恵性の効果を示唆するものである。また、被援助者は、援助要請に応じてもらうことで心理的負債感もち (Greenberg & Westcott, 1983)、自尊感情が低下したり (Fisher et al., 1982)、あるいは等価なものを返報できないと自尊感情が低下する (Fisher et al., 1982) といった研究結果も、互恵性が自尊感情に影響を与える可能性を示すものといえる。くわえて、青年期における互恵的な友人関係の不足が、自我支援 (ego support)、情緒安

定性、能力や価値あるものとしての自己像の発達を妨げる要因とされることは (Bishop & Inderbitzen, 1995), 自尊感情の発達において互恵性が重要な役割をもつことを意味している。互恵性が自尊感情に及ぼす効果を含め、互恵性と自尊感情との相互影響過程については、将来の課題といえる。

最後に、本研究の限界として、調査対象者が男子大学生および大学院生であった点を指摘できる。本研究結果の一般化を行う前に、他の集団による本研究結果の再確認や、性差の検討が必要であろう。また、本研究のデータは横断的なものであったことから、縦断データを用いて、自尊感情と互恵性の因果関係をより詳細に分析することも必要である。

引用文献

- Adams, J. S. 1965 Inequity in social exchange. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.2, Academic Press. Pp. 267-299.
- 相川 充 1986 対人行動と衡平 対人行動学研究会 (編) 対人行動の心理学, 誠信書房, Pp. 295-302.
- 蘭 千尋 1986 対人魅力 対人行動学研究会 (編) 対人行動の心理学 誠信書房 Pp. 136-160.
- 蘭 千尋 1992 セルフ・エスティームの形成と養育行動 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千尋 (編) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版
- Battle, J. 1981 *Culture-free Self-esteem inventories for children and adults*. Seattle: Special Publications.
- Bishop, J. A., & Inderbitzen, H. M. 1995 Peer acceptance and friendship: An investigation of their relation to self-esteem. *Journal of Early Adolescence*, 15, 476-489.
- Brockner, J., O'Malley, M. N., Hite, T., & Davis, D. K. 1987 Reward allocation and self-esteem: The roles of modeling and equity restoration. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 844-850.
- Butler, A. C., Hokanson, J. E., & Flynn, H. A. 1994 A comparison of self-esteem liability and low trait self-esteem as vulnerability factors for depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 166-177.
- Buunk, B. P., & Prins, K. S. 1998 Loneliness, exchange orientation, and reciprocity in friendships. *Personal Relationships*, 5, 1-14.
- Cialdini, R. B., Green, B. L., & Rusch, A. J. 1992 When tactical pronouncements of change become real change: The case of reciprocal persuasion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 30-40.
- Cialdini, R. B., Borden, R. J., Thorne, A., Walker, M. R., Freeman, S., & Sloan, L. R. 1976 Basking in reflected glory: Three (football) field studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 366-375.
- Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: W.H. Freeman.
- DuBois, D. L., Felner, R. D., Brand, S., Phillips, Ruby S. C., & Lease, A. M. 1996 Early adolescent self-esteem: A developmental-ecological framework and assessment strategy. *Journal of research on adolescence*, 6, 543-579.
- 遠藤辰雄 1992 セルフ・エスティームの視座 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千尋 (編) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版 Pp. 8-25.
- 榎本博明 1998 「自己」の心理学 サイエンス社
- Fisher, J. D., Nadler, A., & Whitcher-Alagna, S. 1982 Recipient reactions to aid. *Psychological Bulletin*, 91, 27-54.
- Friedman, H. S. 1976 Effects of self esteem and expected duration of interaction on liking for a highly rewarding partner. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 686-690.
- Gecas, V. 1982 The self-concept. *Annual Review of Sociology*, 8, 1-33.
- Gecas, V., & Burke, P. J. 1995 Self and identity. In K. S. Cook, G. A. Fine, & J. S. House (Eds.), *Sociological Perspectives on Social Psychology*, Boston, MA: Allyn & Bacon. Pp. 41-67.
- Gibbons, F. X., Gerard, M. 1991 Social comparison and smoking cessation: The role of the "typical smoker". *Journal of Experimental Social Psychology*, 27, 239-258.
- Gouldner, A. 1960 The norm of reciprocity: A preliminary statement. *American Sociological Review*, 25, 161-178.
- Greenberg, M. S., & Westcott, D. R. 1983 Indebtness as a mediator of reactions to aid. In J. D. Fisher, A. Nadler & B. M. DePaulo (Eds.) *New directions in helping*. Vol. 1. Recipient reaction and aid. New York: Academic Press. Pp. 85-112.
- 原田純治 1992 援助行動 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千尋 (編) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版 Pp. 156-161.

- Homans, G. C. 1961 *Social behavior: Its elementary forms*. New York: Harcourt, Brace & World
- 磯崎三喜年・高橋 超 1988 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 *心理学研究*, 59, 113-119.
- 伊藤忠弘 1998 特性自尊心と自己防衛・高揚行動, *心理学評論*, 41, 57-72.
- Janis, I. L. & Field, P. B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland, & I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven: Yale University Press.
- 北折充隆 2000 社会規範とは何か—当為と所在に関するレビュー 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 *心理発達科学*, 47, 155-165.
- Kwun, S. K., & Cummings, L. L. 1994 Role of self-esteem in resolving inequity. *Psychological Reports*, 75, 95-111.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. 1995 Self-esteem as in interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- Longmore, M. A., & Demaris, A. 1997 Perceived inequity and depression in intimate relationships: The moderating effect of self-esteem. *Social Psychology Quarterly*, 60, 172-184.
- 松浦 均 1991 親密な二者間の公平性認知における相互比較的検討 *実験社会心理学研究*, 31, 155-166.
- 松浦 均 1992 援助者との関係性が被援助者の返報行動に及ぼす影響 名古屋大学教育学部紀要 *教育心理学科*, 39, 23-32.
- McFarlin, D. B., & Blascovich, J. 1981 Effects of self-esteem and performance feedback on future affective preferences and cognitive expectations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 521-531.
- McFarlin, D. B., Baumeister, R. F., & Blascovich, J. 1984 On knowing when to quit: Task failure, self-esteem, advice, and nonproductive persistence. *Journal of Personality*, 52, 138-155.
- Moreland, R. L., & Sweeney, P. 1984 Self-expectancies and reactions to evaluations of personal performance. *Journal of Personality*, 52, 136-176.
- Nadler, A., Mayselless, O., Peri, N., & Chemerinski, A. 1985 Effects of opportunity to reciprocate and self-esteem on help seeking behavior. *Journal of Personality*, 53, 23-35.
- 中村雅彦 1990 大学生の友人関係の発展過程に関する研究—関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討 *社会心理学研究*, 5, 29-41.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る— *実験社会心理学研究*, 43, 306-314.
- Norem-Hebeisen, A. A. 1976 A multidimensional construct of self-esteem. *Journal of Educational Psychology*, 68, 559-565.
- O'Brien, E. D. 1991 Sex differences components of self-esteem. *Psychological Reports*, 68, 241-242.
- 奥田秀宇 1994 恋愛関係における社会的交換過程—公平, 投資, および互惠モデルの検討 *実験社会心理学研究*, 34, 82-91.
- 奥田秀宇 1996 生物的・社会的・心理的視座から見た対人関係 大坊郁夫・奥田秀宇 (編) *親密な対人関係の科学* 誠信書房 Pp. 1-21.
- Pope, A. W., McHale, S. M., & Craighead, W. E. 1988 *Self-esteem enhancement with children and adolescents*. New York: Pergamon.
- Robson, P. J. 1988 Self-Esteem — A Psychiatric View. *British Journal of Psychiatry*, 153, 6-15.
- Robson, P. 1989 Development of a new self-report questionnaire to measure self-esteem *Psychological Medicine*, 19, 513-518.
- Rook, K. S. 1987 Reciprocity of social exchange and social satisfaction among older women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 145-154.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 佐々木新・島田 修 2000 大学生におけるソーシャルサポートの互惠性と自尊心との関係 *川崎医療福祉学会誌*, 10, 249-254.
- Schwartz, S. H. 1973 Normative explanations of helping behavior: A critique, proposal, and empirical test. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 349-364.
- Stevenson, W., Maton, K. I., & Teti, D. M. 1999 Social support, relationship quality, and well-being among pregnant adolescents. *Journal of Adolescence*, 22, 109-121.
- 末永俊郎・安藤清志 (編) 1998 *現代社会心理学* 東京大学出版会
- 田中堅一郎 1996 公正判断と個人差 大淵憲一・堀毛一也 (編) *対人行動学研究シリーズ5 パーソナリティと対人行動* 誠信書房 Pp. 149-167.

- Taylor, S. E. 1989 Positive illusions: Creative Self-Deception and the Healthy Mind. New York: Basic Books
- Taylor, S. E., Wood, J., & Lichtman, R. 1983 It could be worse: Selective evaluation as a response to victimization. *Journal of Social Issues*, 39, 19-40.
- Tesser, A., & Campbell, J. 1982 A self-evaluation maintenance approach to school behavior. *Educational Psychologist*, 17, 1-12.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. 1984 Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 561-574.
- Thibaut, J. W., & Kelly, H. H. 1959 *The social psychology of groups*. New York: Wiley
- Tilden, V. P., Nelson, C. A., & May, B. A. 1990a Use of qualitative methods to enhance content validity. *Nursing Research*, 39, 172-175.
- Tilden, V. P., Nelson, C. A., & May, B. A. 1990b The IPRI Inventory: Development and psychometric characteristics. *Nursing Research*, 39, 337-343.
- 土田昭司 (編) 21世紀の社会心理学 I 対人行動の社会心理学 北大路書房
- 上野徳美 1986 対人関係と態度 対人行動学研究会 (編) 対人行動の心理学 誠信書房 Pp. 161-192.
- 吉田俊和・松原敏浩 (編著) 1999 社会心理学 ナカニシヤ出版